『真實心』第三十二集　平成22年度2011年3月発行（京都光華女子大学）

まえがき

尊厳死ということを最近よく耳にする。『広辞苑』は次のように説明する。

人格としての尊厳を保って死を迎える、迎えさせる。近代医学の延命技術などが死に臨む人の人間性を無視しがちであることへの反省として認識されるようになる。

少しでも長生きしたい、させたいという欲望が、医学の延命技術を向上させたものの、死に臨む人の人間性、人格を無視、損ないかねない状況を呈することになってしまった。それの反省として尊厳死が唱えられるようになったということである。

しかし、腑に落ちないことが二点ほどある。その一つは、尊厳死を発想した根源に人間の欲望と身勝手さを感ずるのである。一刻も延命させたいといって延命治療を施す。しかし、末期患者の人間性、人格の喪失を見て延命治療を中止する。尊厳死を迎え（させ）るために、と言って。死を迎える人のためにと言っておきながら、死とい

うものが、あるいは尊厳死というものが、生き残る人の都合、身勝手さに支配されているように思えてならない。そんなところに崇高な尊厳死があっていいものであろうか。

その二は、尊厳の有無は、人格の有無に帰せられることであろうかという疑問である。死によってあるいは末期患者が無意識状態なったら、人間の尊厳も消滅してしまうものであろうか。もしそうであれば葬式や法事に人が集まるのは何故なのか。肉体の消滅を持って尊厳の解消とはいえぬであろう。もの言わぬ植物が心に潤いを与えてくれる現実に尊厳を感ずるのは私だけであろうか。法然上人八百回忌、親鸞聖人七百五十回大遠忌が営まれる現実こそ、大いなる尊厳性の生きたる証しといえるのではなかろうか。尊厳死の概念を人格の有無に求めようとする発想は、人間中心主義の弊害の現れといえよう。したがって、「いのち」の尊厳性は、人格の有無にかかわるものでないことも明らかである。清澤満之の次の言葉を含味したい。

生のみが吾人にあらず。死も亦吾人なり。吾人は生死を並有するものなり。吾人は生死に左右せらるべきものにあらざるなり。吾人は生死以外に霊存するものな

り。

（『臘扇記』）

本誌は本学主催の恒例の「宗教講座」における講話を収録している。講師、講題はさまざまであるが、「いのち」への言及が通底としてあるように思う。「いのち」のありようがさまざまな視点から問われる昨今、本誌の味読によってヒントが与えられると確信する次第である。

京都光華女子大学・同短期大学部
学長　一郷正道